

ライブ・ファイヤー・エクササイズ：ロイヤル・バレエの最新ミックスプロ

今月号の日本語ページでは、トップクラスの振付家の作品を揃えたロイヤル・バレエのトリプル・ビルについて、マギー・フォイヤーによる舞台評をお伝えします。

だからといって両者が自然に寄り添うものだとか、あるいはその状態が賛美されるべきものだといったことは、断じてない。音楽はマイケル・ティペットの『ファンタジア・コンセルタンティ』。徹底した平和主義者であり、反戦活動によって投獄された経験を持ち、直接間接にかかわらず戦争を頑として是認しなかった作曲家である。このバレエを作った当事者たちが、ティペットの信念を無視し、その音楽だけを「最高に面白い軍事衝突」を表出する道具として用いてしまったことは、なんとも口惜しい。

ジョージ・バランシンが、メルル・アシュリーの魔法のような技巧を駆使した『Ballo de la Regina(王妃の舞踏会)』を振り付けたのは、1978年のこと。以来、主演バレリーナにとって究極の挑戦ともいえる作品として知られてきたが、マリアネラ・ヌニェスはこれを見ごとにものにしていた。いかにもやすやすと動いているように輝きを放ち、自分の力量を愛でているように、そしてその楽しみを観客にも分け与えるようにして、高度なヴァリエーションを次から次へと踊りこなす。光の点滅のようなフットワークの間にも、両腕は優雅にリラックスして空中を漂っているのである。男性は一人だけだが、これがバランシンの男性のための振付のうちでも最高の一つに数えられる。セルゲイ・ポルーニンは解き放たれた豹のように、舞台上で躍動し、力強い加速で跳躍する。全力で挑むことを求められる難役への、息を呑むほど見事な反応だった。4人のソリストにも、それぞれ特徴的な気質を示す踊りがある。崔由姫の腕も夢のように美しかったが、もっとも印象に残るのは別キャストで第4ヴァリエーションを踊ったイツィアー・メンディザバルだった。

クリストファー・ウィールドンの『DGV(超高速ダンス = Danse à grande vitesse)』は2006年の初演以来、ロイヤル・バレエのレパートリーに定着している作品である。4つのパド・ドゥはさまざまに解釈を巡らせることが可能で、また観たいと思わせる。群舞は万全の仕上がりで、中心キャストがそれぞれの個性を発揮する背後で、メロノームの刻む音に合わせてみごとな一体感を生んでいた。とはいえ、この日の舞台は巧まざる威厳をもって君臨したゼナイダ・ヤノウスキーのものだった。エリック・アンダーウッドとのデュエットでは、両者の強い個性の上に緊張感のある関係が築かれ、そこから妥協のない理想的なフォルムが次々と描き出されていた。一方ギャリー・エイヴィスの確かなパートナーリングに支えられたメリッサ・ハミルトンは、凄烈な現代性の中に独特の女性らしさを湛えていた。ウィールドンは、ただでさえミニマル・ミュージックは難しいところへもってマイケル・ナイマンには焦点がないと語っていたが、たしかに終盤、そのせいで冗長になる部分も認められた。とはいえDGVはやはり爽快で、観るものに活力を与えてくれる名作なのである。(訳:長野由紀)



ロイヤル・バレエの『ライブ・ファイヤー・エクササイズ』(振付ウエイン・マクレガー)
高田茜、リカルド・セルヴェラ Photo: Bill Cooper

3Dで映しだされる砂漠での軍事演習を背景に踊られる、ウエイン・マクレガーの新作『ライブ・ファイヤー・エクササイズ(実弾演習)』で、造形と動きに関しては桁はずれのこの振付家の力量をもっともよく現していたのは一連のデュエットにだった。戦闘行為で疲弊したダンサーが互いの腕に安らぎを求め、独特の極端なポジションに四肢を伸ばしきる。その圧倒的な魅力に比べると個々のステップはやや見劣りし、たとえばプティ・バットゥリーを多用した男性のトリオには、不格好なところもあっていかにも収まりが悪い。視覚的に鮮烈なこの作品の中で、何にもましてドラマティックだったのは、舞台を走ってきた高田茜が鋭いデヴロップのまま背景幕の炎の前にシルエットとなって浮かび上がった瞬間だった。人好きのする少年っぽい外見のリカルド・セルヴェラは本来の個性からはかけ離れた役どころだったにもかかわらず、場面が進むにつれてどんどん引き込まれた。そして、このところそぎ落とされたような強さの出てきたローレン・カスバートソンは、好演揃いの6人のキャストの中でも傑出していた。

ダンサーたちは皆全力を傾け誠実に踊ったが、作品自体には題材をもてあそんだだけの恨みも残る。つまり、戦争の脅威を疑似体験する興味を超えて、兵器使用実験が最終的にどんな結果をもたらすのか警鐘を鳴らすところが皆無なのである。バレエと軍事行動を結びつける試みについては、哲学者のロビン・ケイがプログラムに解説を寄せているが、読者を煙に巻くようなもので、やはり虚しさはぬぐえない。ダンスは生と創造であり、戦争は死と破壊なのだから。

歴史の中で芸術はしばしば権力に奉仕させられてきたが、